

# 人生の意味と幸福——労働の終わりにおいて

福 間 聡

## The Meaning and Happiness of Life: In the Era of End of Work

Satoshi FUKUMA

### 要 旨

本稿の目的は、AI（人工知能）ロボットが我々の労働を代替してくれる世界（AI化された社会）において、有意味で幸福な人生を我々は獲得することは可能であるのかを考察することにある。現代社会にあっては、生活の必要上労働せざるを得ない人びとのみならず、仕事に人生の意味を見いだしている（見いだしていた）人びとは少なくないと思われる。しかしながら、AI技術の指数関数的な進展によって、遠くない将来、AIを搭載したロボットが我々の仕事の多くを代替し、AIによる大規模な技術的失業が発生するという想定を多くの研究者や論者が発表している。では将来訪れる可能性のあるこうした世界においては、どのような活動に我々は人生の意味を見いだしたらよいのだろうか。そうした世界において我々は幸福であるのだろうか。そのような世界において人びとが有意味で幸福な人生を送ることが可能となるためには、どのような政策を政府は実施すべきであるのだろうか。こうした問題について本稿では考察を行う。

### Summary

The purpose of this paper is to examine whether we can get a meaningful and happy life in the social world where AI (artificial intelligence) robots replace our labor. In modern society, it seems that there are not just people under pressure to work for a living but not a few people who find (found) the meaning of life in their work. However, many researchers unveil their supposition that the exponential development of AI technology will allow robots equipped with AI replace most of our work and this will cause large-scale technical unemployment in the not-so-distant future. If this is the case and in the world assumed as such, what kind of activities bring us the meaning of life? Are we happy in such a world? What kind of policies should the

government implement in order to make it possible for us to have a meaningful and happy life in such a world? I investigate these problems in this paper.

## I 序

本稿の目的は、AI（人工知能）ロボットが我々の労働を代替してくれる世界（AI化された社会）<sup>1)</sup>において、有意義で幸福な人生を我々は獲得することは可能であるのかを考察することにある。

AIがプロ棋士に勝利、がんの診断や適合薬の選択をAIが行う、大学入試にAIが挑戦、AIによる自動運転、AIによる機械翻訳の向上、等といった、AIの進歩にまつわるニュースを目にする機会が昨今極めて多い。しかしながらこうしたニュースの中でも、とりわけ我々の耳目を集めているのは、将来の雇用状況に対してどのような影響をAIは与えるのかといったテーマである<sup>2)</sup>。

現代社会にあっては、生活の必要上労働せざるを得ない人びとのみならず、仕事に人生の意味を見いだしている（見いだしていた）人びとは少なくないと思われる<sup>3)</sup>。しかしながら、AI技術の指数関数的な進展によって、遠くない将来、AIを搭載したロボットが我々の仕事の多くを代替し、AIによる大規模な技術的失業が発生するという想定を多くの研究者や論者が発表している<sup>4)</sup>。では将来訪れる可能性のあるこうした世界においては、どのような活動に我々は人生の意味を見いだしたらよいのだろうか。そうした世界において我々は幸福であるのだろうか。そのような世界において人びとが有意義で幸福な人生を送ることが可能となるためには、どのような政策を政府は実施すべきであるのだろうか。こうした問題について本稿では考察を行う。

## II なぜ問うのか

そもそもなぜ我々は人生の意味（meaning of life）や人生の幸福（happiness of life）を問題にするのだろうか。社会が伝統や慣習、そして宗教的な規範に縛られ、人びとに将来を選択する自由が与えられていなかった時代にあっては、この問題は人びとにとって重要なテーマではなかったのかもしれない。なぜなら人生の行路が既に定められており、それに疑念を抱いても自身の意志によって変えることはできなかったからである。しかし我々の時代にあっては、とりわけ先進諸国にあっては、人びとには一定の自由が保障され、自らの意志と責任において将来自分が進むべき道（善の構想）を決定できること（自己決定）が社会の前提になっている。それゆえ人生の中途、あるいは終盤において自らの人生を振り返り、自分が選択した（してきた）人生の在り方は有意義なもの（meaningful）であったのかどうかを問うことが、我々にとって意味をなすのである。

また幸福（happiness）に関しても、“happy”の語源は偶然や運、そして運命を意味する“hap”に由来しており、そもそもは自らの自発的な行為や選択によって獲得できるものではないと考えられていた。また日本語にあっても「幸い」<sup>5)</sup>とは「神仏など他が与えてくれたと考えられる、

自分にとって非常に望ましく、またしあわせに感じられる状態。運のよいこと」と定義されており、“happiness”と同様に捉えられていたように思われる。しかしながら幸福が“welfare”や“well-being”として捉え返されると、自らの努力によって獲得できるものであるという考えが広く受け入れられるようになった。幸運（fortune）でさえも勤勉によって自らに招き寄せることができると考えられるようになったのである<sup>6)</sup>。

このように、人生の有意義性、そして幸福も、自らの責任と勤勉・努力次第で獲得できるものであるという考えが浸透することによって、この問いが人びとにおいて重要な問題になったのではないかと思われる。

現在の社会状況にあっては、我々の人生の意味は仕事によって与えられている、または仕事の中に人生の意味を見いだしている側面が強い<sup>7)</sup>。また人びとの幸福度に最も大きな影響を及ぼしているのは、「仕事が有意義で、自分自身に喜びと満足を与えてくれる」と感じられること、すなわち「仕事の幸福 career wellbeing」であるとの調査結果がある<sup>8)</sup>。それゆえ自らの仕事において何を成し遂げたのか、そしてどのように仕事に取り組んでいたのかが、人生の意味と幸福を問うにあたって中核をなす要素になっていると思われる。しかしながら、その仕事・労働がAIロボットによって奪われてしまうことが予想されている将来の状況下にあっては、幸福であり、かつ有意義な人生を我々は送ることが可能であるのだろうか。

### Ⅲ 労働からの解放

H.アーレントはオートメーション——当世的に言えばAIロボット——の普及によって労働から解放された社会に対して次のような懸念を示している。

「太古以来の夢〔労働から解放された生活〕の実現は、メルヘンで願いごとが叶う瞬間と同じく、夢見ていた幸せが呪いとして働くという、不幸なめぐり合わせとなる。というのも、労働の束縛から解放されることになるのは、ほかならぬ労働社会であって、この社会は、それができるからこそ労働から解放された甲斐があるといえるような、より高次の意味ある活動を、ほとんど知らないといってよいからである。……われわれに差し迫っているのは、労働がなくなってしまう労働社会の前途、つまり、その社会がそれだけは心得ている唯一の活動がなくなってしまう社会の前途、なのである。これ以上に由々しい前途がありうるだろうか」[Arendt 2002: 12f/ 8]。

人間の活動として「労働」という活動しか知らない我々にとって、その労働がなくなってしまうという事態は、華々しい行く末、輝かしい未来を指し示しているのではなく、暗翳を投ずるものとなるのではないだろうか。我々は無意味な人生を送らざるをえないという状況になりはしないだろうか。続けてアーレントは次のように論じている。

「[オートメーションの進展により] あげくの果ては、人間の生をその生物学的循環に縛りつけていたはずの労苦と労働が何一つなくなってしまう、口を開けて食べ物をむさぼり喰らうという消費の「努力」しか残らなくなるということにもなりかねない」[ibid. 154/ 155f]。

労働の他に我々が知悉している活動は、労働と対をなしている「消費」しかなく、それゆえ、「世界を形づくる対象の一切が、ついには使用対象のみならず、いわゆる文化財もことごとく、消尽と虚無化の掌中に帰することになりかねない」[ibid. 157/158] という、労働から解放された社会がもたらす文化の崩壊という看過できない危険性をアーレントは指摘している。こうした状況下にあっては、我々は動物的な満足は得られるかもしれないが、生の意味を見いだすことは困難であるだろう。では、労働・仕事から解放されることは我々にとって悪なのだろうか。

#### IV 仕事の悪と善

そもそも仕事とはどのような活動であるのだろうか。R.アーネソンによれば、喜び以外のことを目的とした著しく努力 (effort) を要する活動が「仕事」であり、努力をさほど要さない、喜びを目的とした活動である「遊び play」とは異なり、また感情の表出行為や日焼けのような振る舞いは「労働」でも「遊び」でもないとされる [Arneson 1998]。またJ.バッドは次の様に仕事を定義している。仕事とは「身体的、あるいは精神的な努力 (exertion) を伴う意図的な人間的活動であり、単に快楽のために行われるのではない、経済的な価値、あるいは象徴的な価値を有した活動である」[Budd 2011: 2]。

この二つの定義とも「努力」という要素が含まれているが、この度合いが大きくなり過ぎると、仕事という活動はその当事者にとって「苦痛」となる。そして現実の労働においては多くの場合この「苦痛」が伴うものとなっており、それゆえ生存のための「必要悪」として労働は見なされている。しかしながら、他方で、その他の悪から我々を免れさせるという役割も労働は有している。ヴォルテールは『カンディード』(1759)において次のように述べている。「仕事をしていると、私たちは人生の三大悪から免れることができる。その三大悪とは、退屈と悪徳と貧困である」。仕事が人生の中心である我々にあっては、労働力以外の資本を有しておらず、教養と道徳性を欠いている我々にあっては、仕事を失うことはこれらの悪を招くことになるだろう<sup>9)</sup>。また次のようにもヴォルテールは述べている。「哲学なんかすることをやめて働きましょう……働くことのみが人生を我慢できるものにする唯一の方法なのです」<sup>10)</sup>。

J.マッコールによれば、失業において我々がしばしば経験するのは、収入の喪失のみならず、同僚と共有していた協働のプロジェクトや社会的な生活から切り離されることによる組織の喪失、貢献感・達成感の喪失、社会への関与の喪失、そして意味の喪失である。換言すれば、労働

は苦役と見なされることが多いが、同時にコミュニティの感覚や自分より大いなる存在（会社、組織、プロジェクト）の一部であるという感覚といった、重要な善を我々に提供してくれてもいる<sup>11)</sup>。そうした善は充実した人生に必要なものであり、それゆえ仕事はそれがもたらす収入を超えた価値を明らかに有している、とマッコールは論じている [McCall 2013]。したがって、仕事の在り方、すなわちどのように仕事在设计・構築されているのかが、仕事を提供するさらなる価値とは何であるのかをまさに決定するのである。

またA.ヴェルトマンは、過去から現在に至る多くの哲学者や宗教において、人間的生にとって基底的で包括的な善（達成、自己実現、成功、健康、幸福、意味と目的、神への奉仕、啓蒙、精神的規律、自立）を達成するための手段として労働は特徴付けられてきたことを指摘している [Veltman 2016: ch. 2]。労働は賃金をもたらしてくれるものであるのみならず、こうした非金銭的な善を勤労者である我々に与えてくれる。とりわけその労働が有意味なものであれば、この善がもたらされる程度も大きい。換言すれば、そうした善をもたらす労働を有意味な労働であると規定することができる。A.ギアウスとL.ヘルゾグは「卓越 excellence」（自らの技能の育成や、その技能を行使することから生まれる成果）、「社会的貢献 social contribution」（社会の維持に必要であり、有益なことをしているという意識）、「コミュニティ community」（比較的自由で平等な関係性にある他の人びとと共に物事を行う経験）、「社会的承認 social recognition」（達成や成果、社会的貢献に基づく他者からの是認）といった四つの善を労働がもたらす善として挙げている [Gheaus and Herzog 2016: 71]。

そしてB.ロッソらは有意味な労働が創造される、あるいは維持される四つ主要な経路として、「個性化 Individuation」、「貢献 Contribution」、「自己との結びつき Self-Connection」、「一体化 Unification」を挙げ、次のように説明している。「個性化」は自己を価値があり、賞賛に値するものと規定し、かつそうした存在として自己を際立たせる行為の有意味性を表している。次に「貢献」は、重要であると認識される行為、または自己よりも偉大な何かに奉じてなされる行為（のいずれか一方、あるいは双方）の有意味性を表明している。そして「自己との結びつき」は個人を彼らが自らを見るあり方と一致するように接近させる行為の有意味性を示している。最後に、「一体化」は他の存在や原理と個人を調和させる行為の有意味性を反映している [Rosso et al. 2010: 115]。労働がこうした経路を介した行為から構成されているものであるならば、それは有意味なものとなるのである。

それゆえ労働が善をもたらすものでなく、「単なる悪」となるのは、その労働が有意味でないもの、疎外されているものである場合であるといえる。K.マルクスの『経哲草稿』（1844）第一草稿第四節「疎外された労働」において、疎外は四つの形態に分類されている。すなわち、（1）労働生産物または自然からの疎外、（2）労働からの疎外、（3）類の本質からの疎外、（4）人間の間人からの疎外、である。松井は疎外された労働を次のように説明している。「労働は、人間が類的存在として自己実現する活動であり、人間と自然、個人と社会を媒介する本質的な活動で

あるが、自然が人間にとって疎遠になり、諸個人が社会から切り離される結果、資本へと転化する自らの生産物に支配されることになる」[松井2010: 134f]。

AIロボットが人間の労働を代替する世界にあっては、人びとを孤立化し、生産物に支配されるという疎外された労働から我々は解放される一方で、労働がもたらす重要な諸善を我々は失うことにもなる<sup>12)</sup>。労働は我々の人生の全てではないが、人生の根幹を成している要素であることは確かであり、労働を強要されることはないが、働きたくても働けないという状況下において、我々は人生において何を目的にし、約80年という時間を何に費やしたらよいのだろうか。もちろんそうした状況下にあっては、仕事以外の活動において人生の意味を見いだすという選択肢もある。しかしながらこれまでの歴史において、人生の大部分の時間を仕事に費やしてきた我々において、仕事から解放された後に、人生を掛けるほどの活動を我々は見いだすことができるのだろうか。

さらに、現在の特化型AIではなく、汎用AI (AGI) によって稼働するロボットは、経済の分野のみならず、学術や政治・政策の領域にまで浸漸し、そうした領域においても人間と同様、あるいはそれ以上の成果を挙げることが見込まれる<sup>13)</sup>。それゆえ学術活動や政治活動（政策の策定・決定）に人生の意味を求めることも困難になる可能性が高い。では、どのような活動において人生の意味を我々は見いだすことが可能であるのか。またこうした世界にあっては幸福な人生を我々は送ることが可能であるのだろうか。またこのように問えるかもしれない。我々は自らの人生と真剣に向き合い、そして満ち足りた生を送ることができるのか、と。このような仕方では人生を送ることが可能であるため、労働がない世界において、我々の生に対する態度、そして政府の政策としてどのようなものが必要となるのだろうか。

## V 人生の意味と幸福：哲学的・心理学的分析

自らの人生と真剣に向き合い、そして満ち足りた生を送ることが可能であるかどうかは、我々の人生の意味や幸福を構成している事柄をどのように解釈するかによって左右される。まず「人生の意味」と「幸福」という概念であるが、これらは概念の使用上、異なる概念であると見なされている。もし人生の意味と幸福が同一の事柄を意味しているのであれば、「私の人生は幸福であったが、有意味なものであったか」という問いは「私の人生は幸福であったが、幸福なものであったか」と問うていることになり、問いとして成立していない。しかし我々は「私の人生は幸福であったが、有意味なものであったか」という問いを真なる問題として実際に問うているのであり、それゆえこの二つの概念は異なるものであると日常語レベルにおいて（一応は）主張しうる。

そして実質的にも「人生の意味」と「幸福」は相互に異なる価値であると考えられる。T.メッツの分析によれば、幸福 (happiness) は主として主観的であるが、他方有意味性 (meaningfulness) は主として客観的である。そして幸福は「楽しい経験」がその核をなしているが、有意味性は「創造的な行為や善行」がその特徴を示している。より詳細には次のようにこの二つの価値は区別さ

れる [Metz 2009: sec.4, 5]。①担い手：人生はたいていの場合、本人の感情や気持ちによって幸福なものとなるが、人生が有意味となるのは主として本人の行為による。②源泉：幸福はその担い手であるポジティブな経験のみと共変する。すなわちポジティブな経験のみが、他の事柄との関わり合いとは無関係に、幸福を構成している（ポジティブな経験に内在的）。他方、有意味性の担い手は行為であるが、有意味性の総体は行為を超えた要因に論理的に依存している。すなわち、同様の行為（たとえば人助け）でも実際に意図した結果が得られた行為の方がより有意味となる（行為を超えた要因と相関的）。③運の役割：運とは我々がコントロールできない、あるいはほぼできない要因が問題となるが、我々は自らの行為自体に対してはある程度のコントロールは可能であるものの、我々がどのように感じるか、そして行為がどのような影響を世界に与えるのかに関してはほとんどコントロールができない。それゆえ幸福も人生の意味も共に運による影響を受けるが、幸福の方が人生の意味よりも運による影響が大きい（感情をコントロールすることは行為をコントロールすることよりも困難であるため）。④適切な態度：幸福に対して抱く適切な態度は、幸福（楽しい経験）が継続することを欲することであると思われるが、他方意味に関しては為されたことに対する尊敬や称賛という態度である。⑤実現が可能な期間：幸福は生きている間にも（経験する能力を有しているときのみ）可能であるが、意味は死んだ後でも（死後に生じる行為の帰結が生前の行為の重要性に影響を与えるため）獲得することができる。⑥実現が望まれる時：幸福は、その程度が小さいものであっても、未来において望まれる価値であるが、他方意味に関しては、さほど有意味でない成果を未来で収めるよりも、有意味な成果を過去で収めていることの方を多くの方は望むであろう。

そして心理学的な調査に基づく分析にあっても、この二つの概念は異なるものと考えられている。R.バウマイスターらによると、「幸福は不快な出来事がほとんどないことを含め、自分のニーズと欲求が充たされていることに根ざしているとみなされる一方で、有意味性は抽象的な価値や他の文化的に媒介された観念に照らして、[自分が置かれている] 経時的な環境の説明的な解釈を要求するため、幸福と比べて相当程度複合的であるとみなされる」[Baumeister et al. 2013: 505]。

より詳しく説明すると次のようになる。①幸福とは主として自分が欲し、必要とするものを獲得することに関わっており、これには他者から与えられること、あるいは単にお金を用いて獲得することも含まれる。対照的に、有意味性は自己を表現・反映することを行うことと結びついており、とりわけ他者にとって好ましいことを行うことと結びついている。②有意味な関わりは自分のストレス、懸念、不安、そして他者との諍いを増加させるが、これらは幸福を縮減するものでもある。③幸福は与益者よりも受益者であることと結びついているが、有意味性は受益者であるよりも与益者であることと関連している。④幸福は現在の充足感に焦点が置かれているが、有意味性は自らの過去・現在・未来を統合して解釈されるものであり、時には不快感をもたらすこともある。⑤過去の不幸は現在の幸福を縮減するが——おそらく人びとはその中に意味を見出すことでその不幸に対処しているので——高い有意味性と結びついている [ibid. 515]。

このように幸福と有意味性は概念上も、そして実質的にも異なる価値であるため、「幸福」と「人生の意味」の観点から自分の人生を顧みた際、以下のような判断が可能である。

- a. 私の人生は幸福でなく、意味もない。
- b. 私の人生は幸福であるが、意味がない（意味はないが、幸福ではある）。
- c. 私の人生は幸福ではないが、意味はある（意味はあるが、幸福ではない）。
- d. 私の人生は幸福であり、意味もある。

この中では、二つの価値を共に実現している（d）と判断される人生が、最も望ましい人生であると考えられる<sup>14)</sup>。ではこのような人生を労働が無くなった世界において、我々は送ることが可能であるのだろうか。あるいは、労働がなくなるからこそ、送ることが可能になるのであろうか。この問いに答えるためにも、以下では、人生の意味と幸福を考察する上で有力な四つの理論をそれぞれ吟味してゆく。そして次に、どのような条件が充たされるならば（d）と判断される人生を我々は送ることができるのかを、それぞれの理論に基づいて検討を行う。

## VI 人生の意味と幸福：四分類

上述したように、有意味性と幸福は二つの異なる価値である。人生の意味と幸福に関する現代の学説として、人生の意味にあっては、①主観充足説 [Ayer 1947; Taylor 1970]、②客観説 [Singer 1993: ch.12, 1997: chs. 10-11]、③目的達成説 [Luper 2014]、④適切な成就説 [Wolf 2010] があり、幸福に関しては、①快楽説（ベンサム）、②客観リスト説 [Griffin 1986: ch. 3; Scanlon 1993; Sen 1999: chs. 2-4]、③欲求（選好）充足説 [Griffin 1986: chs 1-2]、④真正幸福説 [Seligman 2002] が存在する。

表1 人生の意味と幸福の四分類

	人生の意味	幸 福
①主観主義	主観充足説	快楽説
②客観主義	客観説	客観リスト説
③混成説 a	目的追求・達成説	欲求（選好）充足説
④混成説 b	適切な成就説	真正幸福説

表1がその分類であるが、このように人生の意味と幸福についての理論は重なり合っている。しかしながら人生の意味と幸福との間での大きな違いは、上述したように、それらの価値を構成している主要素が後者は主として——すなわち客観リスト説を除き——主観的であるが、前者はそれに尽くされないという点にある。そしてもう一つの点として、前者は本人が能動的に活動し



なければ獲得できないが、後者は必ずしもそうではないという点にあると思われる。以下ではそれぞれの立場を説明してゆく。

①まず「主観充足説 the subjective satisfaction theory」であるが、この説によれば、ある人の人生は、その人が人生に満足する程度や、人生から充実感を得る程度に応じて有意味なものとなる [Campbell & Nyholm 2015: 698]。この立場は伝統的な快樂説と親和性がある。幸福は主観的な感覚の問題であり、幸福な人生とは快の感情を最大化し、苦の感情を最小化している生である [Seligman & Royzman 2003]。

②次に「客観説 objectivism」であるが、これは、人生の意味は正しい信念や誤った信念を有する心理状態とは独立した、物理的である事柄によって（少なくとも部分的には）構成されるとする立場である。何らかの可変的な（移り気な）肯定的態度（pro-attitude）の対象を獲得することは、この立場にあっては、意味にとって十分ではない。誰に対しても意味を付与するある内在的に有意味な、最終的に価値のある条件が存在し、そうした条件は当人によって欲せられ、選択され、あるいは意味があると信じられている訳ではかならずしもない [Metz 2013]。

この客観説によれば、ある人の人生は価値ある事柄を達成する程度、とりわけ世界をより善くしたり、善である事柄を促進することに積極的に関与する程度に応じて、有意味なものとなる [Campbell and Nyholm 2015: 697]。それゆえこの説にあっては、そうした客観的に価値のある事柄を達成したことによって当人が快樂や充足感が得られていることは、人生の意味の本質的な構成要素ではないと考えられている。

幸福についての客観主義である「客観リスト説 the objective list theory」にあっては、幸福は感覚の外部に存し、現実世界において真に価値がある事柄のリストによって規定される [Seligman & Royzman 2003]。すなわち幸福は、人生において追求することが有意味である事柄のリスト中に挙げられている特定の事項を達成することに存している。たとえば、仕事における成果、友情、病気や苦痛からの自由、物質的な快適さ、公民意識、美、教育、愛、知識、そして善意といったものがこのリストには含まれている<sup>15)</sup>。この説にあっては、こうした項目が獲得あるいは付与されることによって、当人が快を得ているか否かは問題とならない<sup>16)</sup>。

③「目的追求・達成説 the aim-achievement theory」によれば、我々の人生において中心的存在であると見なしている目的を追求・達成する程度に応じて、人生は有意味なものとなる [Campbell and Nyholm 2016: 699]。人生の意味を構成する事柄は人によって異なり、人生の意味はその人が強く欲している事柄を獲得することと関連しており、自らが設定し、専念している目的を追求・達成することによってもたらされる<sup>17)</sup>。

この立場と関連した幸福説は「欲求（選好）充足説 the desire-fulfillment theory」であり、幸福とは我々が欲している事柄を実際に獲得するという問題であり、欲求の内容はこの欲求を抱いている当人に委ねられている<sup>18)</sup>。欲求（選好）充足説には多様な立場があるが、とりわけ重要なのは、充たされるべき欲求を十分な情報や合理性、あるいは反省による精査に耐えうる欲求のみ

に制限する立場である<sup>19)</sup>。

④「適切な成就説 the fitting-fulfillment theory」にあつては、人生の意味は、主観的に満足させるものであり、かつ客観的に価値のある活動に我々が従事することに存しているとされる [Campbell and Nyholm 2016: 700f]<sup>20)</sup>。したがって目的追求・達成説との違いは、適切な成就説においては、追求・達成される目的が客観的に善であり、価値あるものであることが要求される点にある [Danaher 2016b]。

この立場と関連した幸福説は、一つ挙げるとするならば、「真性幸福説 authentic happiness」である [Seligman 2002]。この説によれば、幸福には三つの異なる要素が存在し、快適な生（快楽）・善き生（関与）・有意味な生から構成されている。はじめの二つの要素は主観的であるが、三つ目の要素は少なくとも部分的には客観的であり、単なる自己の快と欲求よりも大いなる、そしてより有意義な事柄に属し、促進することに存している [Seligman & Royzman 2003]。

## Ⅶ 幸福と有意味性の一致と不一致

このように対になる四つの人生の意味説と幸福説を踏まえるならば、たとえば、プロゲーマー (professional gamer) になるという目的のために日々ビデオゲーム漬けの生活を送っている人は、当人がそうした生活に満足し、楽しい経験を得ることができているならば、主観主義にあつては有意味で幸福な生を送っていると判断されることになる。また混成説aによっても、批判的な反省をし、十分に知悉した上で、プロゲーマーになることを自身の人生における中心的な目的として設定しているならば、その目的の追求に専心した生を送ることができているため、同様に有意味で幸福な生が実現されていると評価される<sup>21)</sup>。しかしながら、客観主義や混成説bにあつては、そうした生は幸福でも有意味でもない人生と判じられる<sup>22)</sup>。また、親から家業を引き継ぎ、経営者として会社の規模を拡大させ、CSR活動も積極的に行っているものの十分な満足感が得られていない——なぜかというとな当は家業を継がず小説家になりたかった——人の人生は、客観主義にあつては有意味で幸福な生と見なされるが、他の三つの立場においては、幸福でも有意味でもない人生と見なされる。最後に、自らの意志によって善行を行うことで、あるいは芸術的な活動や学術研究といった創造的な活動を行うことで充実感が得られている人の人生は、混成説bに基づいても、有意味で幸福な人生であると判断されると思われる。

このように人生の意味と幸福は、ある人生の評価において重複することがある。でははじめに説明したように、以下のような仕方で幸福と人生の有意味性の間に齟齬を来すのはどのような場合であるのだろうか。

- b. 私の人生は幸福であるが、意味がない（意味はないが、幸福ではある）。
- c. 私の人生は幸福ではないが、意味はある（意味はあるが、幸福ではない）。

一つ目の可能性として考えられるのは、(b) や (c) の判断を下している人は、それぞれ異なる基準の幸福と人生の有意義性に基づいて評価しているということである。すなわち、幸福は主観主義で評価しているが、人生の有意義性については客観主義で評価している場合、これまでの人生に満足しているが、何か社会に貢献するような業績を挙げることはできなかったと考えている人は (b) の判断を下すであろう。また反対に、貢献的な業績を残すことはできたが、それに満足していない人は、自らの人生に対して (c) の評価を示すことになるだろう。

そして二つ目の可能性として考えられるのは、混成説の規準に基づいて判断しているが、人生の有意義性と幸福にあつては、それらの構成要素のウェイトが異なるため、すなわち前者にあつては客観的要素、後者にあつては主観的要素が主要な因子となっているため、人生においてある程度人に誇れる業績は残すことができたが、それに十分満足できていない、あるいは本当はその業績とは別のことをしたかったのだが、できなかったために満足できない人は (c) の判断を下し、他方人に誇れるほどの業績は残すことはできてはいない（あるいは、本当にやりたかったことは実現できなかった）が、それでも自分が成し遂げたことに十分満足している人は、(b) のように自分の人生を見定めるであろう。

したがって自らの生の評価に関して幸福と有意義性という価値の間に齟齬が生じないためには、主観主義あるいは客観主義の立場を双方の規準として採用するか、混成説を採用する場合にあつては何らかの業績行為が存在し、それに対して十分な満足感が得られていることが必要となる。

## Ⅷ AI化された社会における有意義性と幸福

これまでの分析を踏まえると、哲学的な観点から検討された人生の意味と幸福の概念に基づいて考察するならば、労働がAIロボットによって代替される世界において——すなわち、労働から解放され、莫大な余暇がもたらされ、生産現場以外（科学・娯楽・慈善行為・政策決定）でもAIロボットが人びとの活動を代替、あるいは凌駕している世界において——我々が有意義で幸福な人生を送ることは可能であるのだろうか。

この問題を考察する前に、まずは前提条件を整えておきたい。労働から解放されることで膨大な余暇がもたらされる一方で、我々は収入を得る手段を失うことになる。しかしながらAI化は雇用を奪うだけでなく、生産性を飛躍的に向上させるため、適切な再分配政策がとられるならば、誰もが十分な生活を送ることができる社会システムを構築することは可能である<sup>23)</sup>。また大量失業が生じた場合、失業者に対して何の手立ても施さないことは、社会が不安定になり、失業者が暴徒化することが想定される。こうしたことは運良く雇用されている人びとや資本家（AIロボット工場の経営者）、そして政府にとって大きな脅威となるであろう<sup>24)</sup>。資本主義的な形態の経済を持続させていくためには単に生産がなされるだけでなく、生産品の消費が不可欠であるが、製

品を購入できる十分な可処分所得を多くの人が有していない場合、市場経済そのものの存続が危ぶまれる [Ford 2015: ch. 8]。

こうしたことを鑑みるならば、何らかの形での生活保障政策、あるいは所得保障政策が政府によって施行されることが、社会の秩序・安定の維持、ならびに人びとが有意味で幸福な生を送るための必要条件となる<sup>25)</sup>。これを前提条件とした上で、以下ではAI化された社会において、人びとが幸福かつ有意味な人生を送ることができるためのその他の諸条件を各立場の観点から考察して行く。

①まず主観主義の立場にあっては、AI技術の発達によって、最小限の生命維持の機能も内蔵したノーゾックの経験機械 [Nozick 1974: 42-45/67-72] のような疑似体験装置が開発されるならば<sup>26)</sup>、我々は有意味で幸福な人生を送ることが可能となるであろう。それゆえ主観主義によれば、AI化によって労働から解放された社会においても、あるいはこうした社会においてこそ、有意味で幸福な人生を我々は送ることが可能になる。こうした政策を実施する政体は快楽主義的功利主義政府と規定することができるだろう。

②次に客観主義であるが、この立場にあっては、人びとがAI化された社会において有意味で幸福な人生を送ることが可能であるためには、客観的に価値があるとされている事柄を我々が達成できるように政策を政府が施行する必要がある。しかしながら労働はAIロボットによって代替されているので、労働以外における価値ある事柄を実現できるように施策であることが要求される。また本人は満足感を得る必要はないので、我々が何を欲しているのかとは無関係に、我々の適性に応じて最も業績を挙げる事が可能な事柄が、政府の意志決定の中核に置かれているAIによって我々に対して規定されることになるであろう<sup>27)</sup>。それゆえ人生における選択の自由は存在しないと思われる。こうした政策を実施する政体は父権的温情主義政府と規定できよう<sup>28)</sup>。

③混成説aにあっては、有意味で幸福な人生を送ることが可能であるためには、自らが達成することで満足感が得られる目的を追求・実現できるように、政府が支援する必要がある。この目的は本人にとって価値あるものであればよく、それゆえ後述する混成説bとは異なり、善行や創造的な活動といった客観的に価値があるとされる特定の事柄を行いうるよう促されることはない。しかしながら他者に危害を与えるような目的はAIによって規制されることになる（それゆえ反社会的な目的を抱いている人にとっては、人生の有意味性や幸福を獲得することはできないであろう）。そして混成説bと同様に各人が自らの目的を追求・実現するための生活の保障が必要となる（しかし政府の主導による人格の陶冶は必要とされない）。こうした各人の善の構想の自由（善の構想への中立性）を認め、生活の保障を行う政府はリベラルな政府と呼びうるであろう。

④最後に混成説bにあっては、有意味で幸福な人生を送ることが可能であるためには、主観的に満足感を得ることが可能であり、かつ客観的に価値のある事柄を我々が実現できる施策を政府が打ち出すことが要求される。このためには単に経験機械によって仮想的な満足感を与え、かつ最低限の生命維持を供給するという政策や、客観的に価値がある事柄を為すことを我々の意思や欲求とは無関係に強制するという政策では不十分である。メッツの理論に依拠するならば、混成

説bの人生の意味に適合する活動として、「善行」と「創造的な活動」を挙げることができる [Metz 2009]<sup>29)</sup>。それゆえこの立場に基づくならば、人生が有意味かつ幸福なものであるためには、楽しい経験に溢れた善行や創造的な行為を行うことができるか否かが肝要となる。人びとが善行や創造的な行為を行い、それに喜びを見いだすことができるためには、十分な知的教養と情操教育が必要であろう。そしてまた、十分な生活の手段が保障されなければ、そうした活動を行うことはできない。こうした人びとの人格の陶冶と生活の保障を目的とした政体は、リベラルな完成主義政府といえるであろう。

## IX どのような生と政体を我々は選択するのか

どの人生の意味と幸福についての立場と政治体制が望ましいのだろうか。一般的な観点からすると、最もディストピアな状態にあるのは①であることは論を俟たないであろう。経験機械に繋がれ、生存に必要な最低限の手段しか供給されない状態は望ましい人間の生であるとはいえない。また②も、我々の活動がAIによって定められ、何を人生の目的とするかに関して選択の余地がない状態は——現在の我々の観点からすれば——ディストピアであるといえるだろう。そこで残るのは③と④であるが、どちらが適切な人生の意味と幸福についての解釈なのであろうか。どちらの立場が適切であるのかは、AIがどれほど発展するのかという問題と大きく関連している。

### 〈ケース1 AIが人間の知能を凌駕しない場合〉

他の知的活動のみならず、善行や創造的行為の点においてもAIよりも人間の方が優れているという状態にあっては、混成説bとリベラルな完成主義政府が適切な選択肢となる (④)。この状態にあっては、労働から解放された我々は、アーレントが懸念したような、単なる消費活動のみを行う存在とならないように、高次の意味ある活動を行えるような社会システムを構築する必要がある。我々は莫大な余暇時間を用いて真・善・美を追究する活動、すなわち「発明や発見、創造や生産、そして愛や友情や助け合い」といった活動を行うことが可能であり [Brynjolfsson & McAfee 2013: ch.15]、また可能とするための教育・所得保障制度が実施されることになるだろう。誰もがその活動から満足・達成感が得られている、科学者、芸術家、職人、そして慈善活動家となりうる社会が実現され、人びとは人生の意味と幸福を獲得しうると思われる。

### 〈ケース2 AIが技術的特異点 (シンギュラリティ) を迎え、人類の知能を凌駕する場合〉

このケースにあっては、善行や創造的活動においてもAIの方が人間よりも優れているという事態が生じる。こうした状況にあっては、善行や創造的活動を行ったとしても、満足感は得られるかもしれないが、有意味性は実現できないのではないだろうか。たとえば、自分が研究しているテーマと同一のテーマを研究している非常に優れた研究者が存在する場合、そのテーマで論文を

執筆しても、それよりも優れた論文をその研究者が発表することが予想されるならば、論文を完成させたこと自体には満足感を見いだせるが、その論文執筆の意義は見いだせないのではないだろうか。これと同じことがAIロボットと人間との関係にも当てはまる。

また、AIと人間が融合（義体化・サイボーグ化）して活動を行うことで、AIロボットと同等の業績を善行や創造的活動において人びとは上げることが可能になるという提案をJ. ダナハーは行っているが [Danaher 2016b]、この状態は経験機械との違いが無くなってしまわないだろうか。義体化にあっては、業績の主体（行為者性）が本人にあるのか、それとも補助しているAIの方にあるのか、曖昧になってしまい（業績に対する賞賛が向けられるべきなのは誰なのだろうか?）、ある業績を達成したとして、自らがそれを成し遂げたとは考え・感じたい状況になると思われる<sup>30)</sup>。こうした状態では幸福も有意味性も自らが為したとされる「活動」に見いだせないのではないだろうか。

それゆえこのケースにあっては、特定の、客観的に価値がある活動のみに有意味性と幸福を結びつけるのではなく、何であれ自分が理性的に反省した上で目的としたものを追求・達成することが人生を有意味で幸福なものとする混成説aと、他者に危害を加えない限りそうした目的を全て容認するリベラルな政府が適切な選択肢になると思われる (③)。成し遂げる事柄自体はAIロボットには敵わないかもしれないが、自分が目的とすることを追求・達成することで、人生の有意味性と幸福を我々は獲得することができるようになるであろう<sup>31)</sup>。

したがって〈ケース1〉のようにAIが人間の知能を凌駕しない場合にあっては、混成説bとリベラルな完成主義政府が適切な選択肢となり、〈ケース2〉では混成説aとリベラルな政府が適切な選択肢になると思われる。卓越的な活動であると見なされてきた活動（善行と創造的活動）に価値を見いだす人びとは、〈ケース1〉の状況の方を望ましい状態とみなすであろうし、客観的な評価とは無関係に自らが目的とすることを追求・達成することに価値を見いだす人びとは〈ケース2〉の状況を好ましいと考えるであろう。

とりわけ〈ケース1〉にあっては、仕事以外の活動も善であり、仕事は人間的繁栄 (human flourishing) にとって重要な要素であるが、唯一の要素ではなく、知識、愛、友情、社交、道徳的美徳といった事柄も不可欠であり、そうした事柄に対して我々は今まで以上に価値を見いだす必要がある。こうした善を実現するためには知的・道徳的な発展もこれまで以上に必要とされる。人生の意味と幸福を獲得するためには、人的諸能力 (human capabilities) の発展と多元的な善の構想を有していることが要求される [Veltman 2016: 37]。そしてこのためにリベラルな完成主義政府による積極的な支援が行われる。他方〈ケース2〉にあっては人間的繁栄にとってそうした善の構想の多様性と人的諸力の発展を望ましいとする完成主義的な要求は意味をなさない。しかしながら、自らの目的を追求・達成するために必要な諸能力の涵養は最低限必要になる。それゆえ、自らの目的に応じてどのような能力を身に付ける必要があるのかを見定め、それを発展

させることが肝要であり、そうすることで自らが望ましいと考える目的を追求・実現することが、人生の意味と幸福にとって中核を成すのである。

## X 望ましい所得保障政策

これまでの考察を踏まえると、AIロボットによって仕事が無くなる状況になったとしても、人びとは人生の意味と幸福を獲得することは可能であるといえるだろう。しかしながらそのためには、上述したように、仕事から得られる所得の代わりに人びとの生活を保障する、なんらかの所得保障政策が必要であり、とりわけ「ベーシックインカム (BI)」という形態での保障が求められる<sup>32)</sup>。

たとえば、所得保障の受給者に対して、一定の勤労あるいは職業訓練を義務づけ、給付を労働や訓練の対価とすることによって、その精神的自立を促すと共に、勤労・訓練を通じて将来の経済的自立の基盤たる技術・技能を身に付けさせようとする「ワークフェア」は、AI化された社会にあってはその実施が困難となる。なぜなら、AIロボットによってほとんどの労働が代替されている状況にあり、またそれゆえに極めて特殊で高度な能力・技能を有している者でないと職は得られない状況となっているからである。また課税最低所得以下の人に最低所得との差額の一定率を政府が支払う制度である「負の所得税」は、ほとんどの人は勤労所得を得ることができず、また職を有している稀少な人びとは高額な報酬が得られている状況にあると思われるため、実施においてBIとの違いは無くなる。そして、個人ベースで資産調査無しに支払われるという特徴はBIと共有しているが、健常者の場合にあっては——必ずしも賃労働でなくともよいが——何らかの形での貢献的活動（介護や家事、NPOやボランティア活動等）を行っていることを必須条件として給付が支払われる施策である「参加所得」であるが、この政策はそもそもBIの代替案として、反対者にとってもBIを受け入れやすい形態とするためにそもそも提案されたという経緯がある（とりわけ無条件性に抵抗をもつ人びとに対して<sup>33)</sup>）。しかしながら互惠性やフリーライダーの存在に基づくBIへの批判に対しては、ほとんどの人が働いていない状況にあるため、互惠性を要求する根拠や他者の労働へのフリーライドを懸念する理由がなくなると反論できる。それゆえ参加所得を提起する理由がなくなる。また高額な税金が徴収される富裕層からのBIに対する反発への応答としては、AIロボット工場の経営者が自らの富を維持したいのであれば、人びとに工場での生産物を購入してもらう必要があるため、法人税を通じて利益の一部をBIの財源とすることに積極的になるとと思われる。それゆえこれまでに無かった富裕層からの支持がBIに与えられることになるであろう<sup>34)</sup>。したがって、AI化された社会にあっては、BIが最も適切で妥当性を有する所得保障政策であるといえる<sup>35)</sup>。

## 結 論

AI化された社会は、極めて少数の限られた人びとのみが労働することが可能な世界であり、彼らは従来通りに、あるいはその希少性から今まで以上に、仕事から人生の意味と幸福を獲得することができるかもしれない。しかしながら、労働を行うことができずとも我々は有意義な人生を送ることは可能でありうることを本稿では示した。労働、とりわけ有意義な労働は人生の意味や幸福にとって不可欠なものかもしれないが、唯一の活動では無く、BIが保障されるならば、その他の活動を通じても同様に幸福や人生の意味を我々は獲得することができる<sup>36)</sup>。

AIロボットによって労働から解放され、そしてBIによって生活が保障されることによって、自らが真に欲していることを我々は見いだすことが可能になるのであり、そうした状況においてこそ人生の意味と幸福の探求と実現は人類史において初めて開始されるのではないだろうか。我々は自らの人生と真剣に向き合い、そして満ち足りた生を送ることができるのかという問いの探求はここからはじまる。

(ふくま さとし・高崎経済大学地域政策学部准教授)

## 註

- 1 「AIロボットが我々の労働を代替してくれる世界」とは人間の労働が全く無くなる世界ではなく、AIロボットが従来の多くの労働を代替することが可能であるため、人間に残されている仕事は極めて高度な能力・技術を要するものとなり、それゆえほとんどの人はそうした仕事に就くことができない状況にある世界である。井上は日本にあっては2045年において、食べていけるだけの収入のある職を有しているのは全人口の一割ほどである可能性を示唆している [井上 2016: 166f]。
- 2 たとえば総務省は『平成28年版 情報通信白書』の第4章第3節において「人工知能 (AI) の進化が雇用等に与える影響」について報告している。(http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/na000000.html) (2016年12月1日閲覧)
- 3 本稿においては労働と仕事を区別せず、互換可能な用語として用いる。
- 4 AI技術の発展による大規模な技術的失業について論じている文献として、[Ford 2015]、[Frey & Osborne 2013]、[井上 2016]、[Wallach 2015] 等がある。また反対論——大規模失業は起こらない——としては [西垣 2016] がある。中間的な立場に立つ文献としては [Brynjolfsson & McAfee 2011, 2013] がある。
- 5 『語厄利語林大成』では“happiness”に漢語として「幸福」が、和語として「幸(さいわい)」が当てられている。
- 6 スマイルズの『自助論』には次のような一説がある。「人間の幸福 (welfare) という道は、たゆまぬ善行という昔ながらの大通りに沿って伸びるもので、もっとも努力を続けもっとも誠実に働いたものが、常に最大の成功を得るのである」(第四章)。「幸運の女神 (fortune) は目が見えないとよく言われるが、目が見えていないのは人間の方だ。現実の人生に目をやれば、幸運の女神はたいてい勤勉な者のもとに訪れることがわかるだろう」(同)。また本稿では“happiness”、“well-being”、“welfare”を異なる概念として扱わない。それゆえ全てに「幸福」という訳語を用いる。
- 7 男性の場合42.9%の人が「仕事・学業」に生きがいを見いだしているという調査結果がある。一般社団法人中央調査社「「生きがい」に関する世論調査」『中央調査報』(No.636) <http://www.crs.or.jp/backno/No636/6362.htm> (2016年11月18日閲覧) を参照。
- 8 米調査企業ギャラップ社の調査に基づく [Rath & Harter 2010: ch.1]。人の幸福 (wellbeing) を決定する五つの要素として他に、「人間関係の幸福」(強い信頼と愛情でつながっている人間関係を持っているか)、「経済的な幸福」(人生を支える資産を、効果的に管理運用できているか)、「身体的な幸福」(健康状態が良好か)、「地域社会の幸福」(住んでいる地域とつながっている感覚があるか) が挙げられている [Rath & Harter 2010: 6]。
- 9 『礼記』の「大学」にあるように「小人閑居して不善をなす」と。
- 10 『カンディード』からの引用は共に英訳からの重訳である。
- 11 こうした善は「自己利益の善」や「道徳に関わる善」ではなく、「人生の有意義性に関わる善」である。この善の三分類に関しては [Wolf 2010] を参照。
- 12 したがって前節の最後の問いに答えるならば、疎外された労働から解放されることは我々にとって善であるが、有意味



- な労働を失うことは我々にとって悪である、といえる。
- 13 こうした事態についてJ.ダナハーは指摘している [Danaher 2016b]
- 14 このような人生の状態を、日常語では「有意義な人生 significant life」 [Singer 1992: ch.4]、あるいはアリストテレスの「エウダイモニア」 [神崎 2006]、もしくはM.セリグマンが現在定義する意味での「ウェルビーイング」 [Seligman 2011] と規定することができるかもしれない (セリグマンの「ウェルビーイング」概念についての批判的な検討は [江口 2015] を参照)。またヴェルトマンはエウダイモニアの一般的な英訳である“human flourishing”と“well-being”との概念的な肖似性について言及している [Veltman 2016: 51 n44]。
- 15 客観リスト説における善 (善いもの) としてD.パーフィットは、「道徳的善性、理性的活動、自らの能力の発展、子どもを持ち、かつ善い親であること、知識、真の美しさの認識」を挙げている [Parfit 1984: 499]。
- 16 人生の意味の客観説と幸福の客観リスト説との差異は、前者は本人の行為がその構成要素となっており、それゆえ自らの行為によって客観的に価値のある事柄を獲得することが要求されるが、後者にはそうした事柄が自分の行為でなくとも、すなわち他者 (の行為) からもたらされた場合であっても構わない、という点にある。
- 17 “Meaning of Life: Contemporary Analytic Perspectives,” by Joshua Seachris, The Internet Encyclopedia of Philosophy, ISSN 2161-0002, <http://www.iep.utm.edu/> (2016年11月18日閲覧) を参照。
- 18 ある人の欲していることが多くの快楽と少ない苦痛であるならば、欲求充足説は快楽説を包含する立場となる。快楽説と欲求 (選好) 充足説との違いは、快楽説にあっては本人が最も望んでいることではないとしても、苦痛よりも快楽が優越することが幸福への手段となる。他方欲求 (選好) 充足説にあっては、快楽 (あるいは苦痛) の量がいかであるかと、欲求 (選好) の充足——欲求 (選好) している事柄が実現されること——が我々の幸福に寄与すると主張される [Seligman & Royzman 2003]。
- 19 たとえば「知悉的欲求理論 informed-desire theory」 [Haybron 2007: 23] などがこの立場となる。
- 20 この立場の代表者であるS.ウルフは、人生の意味は主観的な興味と客観的な誘引性と合致する (subjective attraction meets objective attractiveness) とき、すなわち、客観的に価値のあるプロジェクトに積極的に関与することからもたらされる、と説明している [Wolf 2010: 62]。
- 21 目的追求・達成説の代表者であるS.ルーパーによれば、たとえ本人が大いに専心している目的であっても、それが岩を丘の上に押し上げることや葉っぱの枚数を数えることのような退屈で反復的な作業であれば、それらを達成することで意味を獲得することができるとしても、その生は非常に精彩を欠くことになる論じている [Luper 2014: 208]。しかしながら目的追求・達成説を採る限り、些末な目的に専心することによっても人びとは意味を獲得することが——理論的には——可能であることを彼は示唆している。ただし、我々の人生に意味を付与する目的は我々の「必須の自己 critical self」を部分的に構成するものであるため、そうした目的としてどのような目的も相応しいという訳ではない。しかしながらそうであるとしても、そうした目的や活動の「相応しさ」の規準はウルフが想定しているような、客観的、外在的なものではなく、本人の「分別のある判断」に基づくことを彼は指摘している [ibid. 209f]。
- 22 ウルフは客観的に価値があるとはいえない活動の例として、岩を丘の上に無益に押し上げることや、『戦争と平和』の写本を作成すること、数独の問題を解くこと、そしてペットの金魚を世話することを挙げている [Wolf 2010: 36]。
- 23 AIによる技術的 (大量) 失業とベーシックインカム (BI) 政策の必要性に関しては、次の文献を参照されたい。 [Ford 2015], [井上 2016], [Walker 2015]。他方ブリニョルソンとマカフィーは負の所得税を支持している [Brynjolfsson & McAfee 2013]。
- 24 AIによる大量失業に起因する社会の不安定化の問題に関しては、 [Walker 2015] を参照。
- 25 AI化された社会における望ましい社会保障政策についての検討は第X節で行う。
- 26 諸星大二郎の「夢みる機械」のような状況を想定して欲しい [諸星 2004]。
- 27 諸政策の決定を行う政治家や官僚をAIが支援する、あるいは代替する政府形態は、現在「アルゴクラシー algocracy」と名付けられている。そうした政府の特徴と問題点については [Danaher 2016a] を参照。
- 28 またこうした父権の温情主義に適合した、介入的な社会保障政策が実施されることになろう。
- 29 ウルフの説明にあっては、有意義な活動とは、その活動をしている本人が満足していることに加えて、客観的な価値をその活動が有していること、すなわち「その活動をしている本人以外にその価値の源泉があり、……その活動に対する本人の態度から部分的に独立している価値を有していなければならない」ことが要件となっている。 [Wolf 2010: 37]。こうした活動は善行や創造的活動よりも広い活動を含んでおり、家族や友人との良好な関係や政治的・社会的な大義への関与といった活動、自然の美を保護すること、ある事柄において卓越することへの努力、自らの諸力を発展させる努力 (走者、チェロ奏者、家具職人、菓子職人として) なども含まれる [ibid.]。
- 30 たとえば、複数のインターネットのサイト上の文章をコピー・アンド・ペーストしてレポートを作成した場合と同様の状況が生まれるのではないだろうか。
- 31 たとえば現時点においても、すでにAIがプロ棋士に勝利するようになっているが、そうであっても囲碁や将棋を上達したいと思っている愛好家がいなくならないように、またGoogleで「円周率」と検索すれば百万桁まですぐに調べることができるにもかかわらず、円周率の暗記の世界記録 (7万30桁) の更新をライフワークにしている人がいるように、AIが発達し、我々の諸能力を凌駕するとしても、様々な活動において我々のアマチュア的な関心は減退しないと思われる。それゆえ善行や創造的活動であっても、アマチュア的な関心に基づいたものであるならば、人びとはそれらの活動から人生の意味と幸福を獲得することができるであろう。何であれ、自らが目的とするものの追求・実現が有意義性と幸福を人びとにもたらすのである。

- 32 Basic Income Earth Network (BIEN) による最新の定義づけにあつては、以下の五つの特徴を有した所得保障政策としてBIは説明されている。
- ①定期的：BIは定期的に（たとえば毎月）支払われ、一回限りの補助金として支払われるのではない。
  - ②現金による支払：BIは、それを受け取る人びとがそれを何に費やすかを決定することが可能な、適切な交換媒介物において支払われる。それゆえBIは現物（食物やサービスなど）や、あるいは特定の用途に特化した引換券（バウチャー）によって支払われることはない。
  - ③個人単位：BIは個人ベースで支払われるのであり、したがって、たとえば世帯に対して支払われるのではない。
  - ④普遍的：BIは全ての人に対して、資産調査なしに支払われる。
  - ⑤無条件：BIは働くことや、働く意欲を示すという要件なしに支払われる。
- (<http://basicincome.org/basic-income/>) (2017年2月16日閲覧)
- 33 [Atkinson 1996] を参照。
- 34 またロボットとAI技術の発達はいくまでの人類の叡智と我々の税金の投入によって可能になったのであり、そうした技術からもたらされる利益に対しては誰もが請求権を有していると考えられるならば、この権利がAI化された社会におけるBIの根拠となるであろう。
- 35 BIの導入に関して、その財源に対してこれまで様々な批判がなされてきたが、AIロボットが労働を代替する「純粋機械化経済」にあつては、この問題は取り立てて重要なものとはならない（所得税、消費税、相続税、法人税のいずれでも構わない）ことを井上は指摘している [井上 2016: 234]。BIについての詳しい説明は [福間 2014: 第四章] を参照。
- 36 将来訪れるAI化された社会に我々や政府が適切に対応するためには、低額のBIの漸次的な支給を現時点から行い、非労働的な生活に我々が順応していけるようにする方策が採られるべきであろう。たとえば、人間の労働力の代わりにロボットを導入する企業に対して、そのロボット化の割合に応じて比例的に法人税率を増加させ、それを暫時的なBIの財源とすることが考えられる。

#### 文献表

- Arendt, Hannah. 2002 (1960). *Vita Activa oder Vom Tatigen Leben*, Piper. (邦訳) ハンナ・アーレント『活動的生』(森一郎訳) みすず書房, 2015年.
- Arneson, Richard. 1998. "Work, philosophy of," in *Routledge Encyclopedia of Philosophy*, (ed. by Edward Craig), Routledge.
- Atkinson, Anthony B. 1996. "The Case for a Participation Income," *Political Quarterly*, Vol. 27: 1, pp. 67-70.
- Ayer, Alfred J., 1947. "The Claims of Philosophy", repr. in Klemke, E. D. and Cahn Steven M. (eds.) 2007.
- Baumeister, Roy F., Vohs, Kathleen D., Aaker, Jennifer L. and Garbinsky, Emily N. 2013. "Some Key Differences Between a Happy Life and Meaningful Life," *The Journal of Positive Psychology*, Vol. 8: 6, pp. 505-516.
- Bortolotti, Lisa (ed.) 2009. *Philosophy and Happiness*, Palgrave Macmillan.
- Budd, John W. 2011. *The Thought of Work*, Cornell University Press.
- Brynjolfsson, Erik and McAfee, Andrew. 2011. *Race Against the Machine: How the Digital Revolution Is Accelerating Innovation, Driving Productivity, and Irreversibly Transforming Employment and the Economy*, Digital Frontier Press. (邦訳) エリック・プリニョルフソン、アンドリュウ・マカフィー『機械との競争』(村井章子訳) 日経BP社, 2013年.
- 2013. *The Second Machine Age: Work, Progress, and Prosperity in a Time of Brilliant Technologies*, W. W. Norton & Company, (邦訳) エリック・プリニョルフソン、アンドリュウ・マカフィー『ザ・セカンド・マシン・エイジ』(村井章子訳) 日経BP社, 2015年.
- Campbell, Stephen M. and Nyholm, Sven. 2015. "Anti-Meaning and Why It Matters," *Journal of the American Philosophical Association*, Vol. 1: 4, pp. 694-711.
- Danaher, John. 2016a. "The Threat of Algocracy: Reality, Resistance and Accommodation," *Philosophy & Technology*, Vol. 29: 3, pp 245-268.
- 2016b. "Will Life Be Worth Living in a World Without Work? Technological Unemployment and the Meaning of Life," *Science and Engineering Ethics*, Vol. 23: 1, pp 41-64.
- 江口 聡 2015. 「幸福についての主観説と客観説、そして幸福の心理学」『哲学の探求』第42号. [http://www.wakate-forum.org/data/tankyu/42/42\\_02\\_eguchi.pdf](http://www.wakate-forum.org/data/tankyu/42/42_02_eguchi.pdf) (2017年3月30日閲覧).
- Eid, Michael. and Larsen, Randy J. (eds.) 2007. *The Science of Subjective Well-Being*, Guilford Press.
- Ford, Martin. (2015) *The Rise of the Robots: Technology and the Threat of Mass Unemployment*, Oneworld Publications. (邦訳) マーティン・フォード『ロボットの脅威——人の仕事なくなる日』(松本剛史訳) 日本経済新聞、版社, 2015年.
- Frey, Carl Benedikt and Osborne, Michael A. (2013) "The Future of Employment: How Susceptible Are Jobs to Computerisation?" [http://www.oxfordmartin.ox.ac.uk/downloads/academic/The\\_Future\\_of\\_Employment.pdf](http://www.oxfordmartin.ox.ac.uk/downloads/academic/The_Future_of_Employment.pdf) (2016年11月18日閲覧).
- 福間 聡 2014. 『格差の時代の労働論——ジョン・ロールズ『正義論』を読み直す』現代書館.
- Gheaus, Anca and Herzog, Lisa. 2016. "The Goods of Work (Other Than Money!)," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 47: 1, pp. 70-89.
- Griffin, James. 1986. *Well-being: Its Meaning, Measurement, and Moral Importance*, Oxford University Press.
- Haybron, Daniel M. 2007. "Philosophy and the Science of Subjective Well-Being," in Eid, Michael. and Larsen, Randy J. (eds).

- 井上 智洋 2016. 『人工知能と経済の未来——2030年雇用大崩壊』 文藝春秋.
- 神崎 繁 2006. 「幸福」, 『現代倫理学事典』(編集代表・大庭健) 所収, 弘文堂.
- Klemke, E. D. and Cahn Steven M. (eds.) 2007. *The Meaning of Life: A Reader*, 3rd ed., Oxford University Press.
- Luper, Steven (ed.), 2014. *The Cambridge Companion to Life and Death*, Cambridge University Press.
- Luper, Steven. 2014. "Life's Meaning," in Luper, Steven (ed.).
- McCall, John J. 2013. "Work, Nature and Value of," in *The International Encyclopedia of Ethics*, (ed. by Hugh LaFollette), Wiley-Blackwell.
- 松井 暁 2010. 「疎外論と正義論」, 専修大学経済学会編『専修経済学論集』第44巻3号, pp. 133-158.
- Metz, Thaddeus. 2009. "Happiness and Meaningfulness: Some Key Differences," in Bortolotti, Lisa (ed.).
- 2013. "The Meaning of Life," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2013 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/sum2013/entries/life-meaning/>>. (2016年11月18日閲覧)
- 諸星 大二郎 2004 (1974). 「夢みる機械」, 『汝、神になれ鬼になれ——諸星大二郎自選短編集』 所収, 集英社.
- 本木 庄左衛門 1814. 『譜厄利亜語林大成』.
- [http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB\\_ID=G0003917KTM&C\\_CODE=0091-027502&IMG\\_SIZE=&PROC\\_TYPE=null&SHOMEI=%E3%80%90%E8%AB%B3%E5%8E%84%E5%88%A9%E4%BA%9C%E8%AA%9E%E6%9E%97%E5%A4%A7%E6%88%90%E3%80%91&REQUEST\\_MARK=null&OWNER=null&IMG\\_NO=224](http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0091-027502&IMG_SIZE=&PROC_TYPE=null&SHOMEI=%E3%80%90%E8%AB%B3%E5%8E%84%E5%88%A9%E4%BA%9C%E8%AA%9E%E6%9E%97%E5%A4%A7%E6%88%90%E3%80%91&REQUEST_MARK=null&OWNER=null&IMG_NO=224) (2016年11月18日閲覧).
- 西垣 通 2016. 『ビッグデータと人工知能——可能性と畏を見極める』 中央公論新社.
- Nozick, Robert. 1974. *Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books. (邦訳) ロバート・ノージック『アナキー・国家・ユートピア——国家の正当性とその限界』(嶋津裕訳) 木鐸社, 1996年.
- Nussbaum, Martha C. and Sen, Amartya Kumar (eds.). 1993. *The Quality of life*, Oxford University Press.
- Parfit, Derek. 1987. *Reasons and Persons*, repr. ed., Oxford University Press. (邦訳) デレク・パーフィット『理由と人格——非人格性の倫理へ』(森村進訳) 勁草書房, 1998年.
- Rath, Tom and Harter, Jim. 2010. *Wellbeing: The Five Essential Elements*, Gallup Press. (邦訳) トム・ラス、ジム・ハーター『幸福の習慣』(森川里美訳) デイスカヴァー・トゥエンティワン, 2011年.
- Rosso, Brent D., Dekas, Kathryn H. and Wrzesniewski, Amy. 2010. "On the Meaning of Work: A Theoretical Integration and Review," *Research in Organizational Behavior*, Vol. 30, pp. 91-127.
- Scanlon, Thomas M. 1993. "Value, Desire, and Quality of Life," in Nussbaum, Martha C. and Sen, Amartya Kumar (eds.).
- Seligman, Martin E. P. 2002. *Authentic Happiness: Using the New Positive Psychology to Realize Your Potential for Lasting Fulfillment*, Free Press.
- 2011. *Flourish: A New Understanding of Happiness and Well-Being - and how to Achieve Them*, Nicholas Brealey Publishing.
- Seligman, Martin E. P. and Royzman, Ed. 2003. "Happiness: The Three Traditional Theories," <https://www.authenticchappiness.sas.upenn.edu/newsletters/authenticchappiness/happiness> (2016年11月18日閲覧).
- Sen, Amartya Kumar. 1999 (1985). *Commodities and Capabilities*, Oxford University Press. (邦訳) アマルティア・セン『福祉の経済学——財と潜在能力』(鈴木興太郎訳) 岩波書店, 1988年.
- Singer, Irving. 1992. *Meaning in Life: The Creation of Value*, Free Press. (邦訳) アーヴィング・シンガー『人生の意味——価値の創造』(工藤政司訳) 法政大学出版局, 1995年.
- Singer, Peter. 1993. *Practical Ethics*, 2nd ed., Cambridge University Press. (邦訳) ピーター・シンガー『実践の倫理』(山内友三郎・塚崎智監訳) 昭和堂, 1999年.
- 1997. *How Are We to Live?: Ethics in an Age of Self-Interest*, Oxford University Press. (邦訳) ピーター・シンガー『私たちはどう生きるべきか——私益の時代の倫理』(山内友三郎監訳) 筑摩書房, 2013年.
- Smiles, Samuel. 1897. *Self Help: With Illustrations of Conduct and Perseverance*,  
<http://www.gutenberg.org/files/935/935-h/935-h.htm> (2016年11月18日閲覧). (邦訳) サミュエル・スマイルズ『新・完訳 自助論』(久保美代子訳) 2016年.
- Taylor, Richard. 1970. *Good and Evil*, Macmillan Publishing Co.
- Voltaire 2008 (1759). *Candide and Other Stories*, (trans. by Roger Pearson), Oxford University Press.
- Veltman, Andrea. 2016. *Meaningful Work*, Oxford University Press.
- Walker, Mark 2015. *Free Money for All: A Basic Income Guarantee Solution for the Twenty-First Century*, Palgrave Macmillan.
- Wallach, Wendell. 2015. *A Dangerous Master: How to Keep Technology from Slipping Beyond Our Control*, Basic Books. (邦訳) ウェンデル・ウォラック『人間vsテクノロジー——人は先端科学の暴走を止められるのか』(大槻敦子訳) 原書房, 2016年.
- Wolf, Susan. R. 2010. *Meaning in Life and Why It Matters*. Princeton University Press.

謝辞

本研究はJSPS科研費26370033 (「働くことの意味と所得保障政策との規範的な関連性の検討」 基盤研究 (C)) の助成を受けたものである。